計画・設計技術と大規模公園

The Character of Design and Planning Method for Large-scale Park

糸谷 正俊*
Masatoshi ITOTANI

はじめに

大規模な都市公園の計画・設計にかかわった体験をもとに、コンサルタントの立場から大規模公園の計画・設計上の展望等について検討する。なお本稿で扱う大規模公園は、広域公園、レクリエーション都市という公園制度上の大規模公園に加え、国営公園や、広域的な誘客を前提とする全国都市緑化フェア・国民体育大会等の主会場となる都市公園も検討対象とする。

1. 大規模公園の計画・設計上の特徴

大規模公園とは、一義的には大規模な面積を有する都市公園（概ね 50ha 以上）と理解される。大規模公園は通常、広域レクリエーション需要に対応する公園機能を有するものであるが、その他防災機能、環境保全機能など多様な複合的な機能を具備し、また広域的な視点からの政策目標を実現する施設であるため、計画・設計上求められる技術は、高度で総合的である。

以下、計画・設計上の観点から大規模公園の特徴を見る。

①長期性

大規模公園は計画立案から全体整備完了までに長期間を要する。したがって計画・設計上、一定の時間的経過に耐える公園計画が求められる。流行に左右される公園施設やレクリエーション種目の導入は、完成時に陳腐化する場合もある。

②経営性

整備コスト・管理コストが莫大となることから、経営側面から一定の収益性が要求される。とはいえ大規模公園が単独で採算ベースにのことはまず無い。逆に儲かるレクリエーション施設は民間にまかせるべきという意見が主流であり、公共の都市施設として目標とする収益は、維持管理コスト程度とされる。しかし大規模公園の管理実態は、ほとんどの公園でかなりの一般財源の持出しとなっている。財政が逼迫している中で、経営視点を含んで計画・設計する場合がさらに増えていくと予想される。

③政策性・戦略性

多くの大規模公園の場合、計画の発端は大規模イベントの誘致会場や、特定地域重点開発の目玉であるなど、政策意図が戦略的で明確である。したがって、その政策性・戦略性に応える計画・設計が前提となる。国際イベントなどあらかじめ日時の決まっている会場公園では、拙速といわれようとも完成日を遅らせるわけにはいかない。極端な場合、新知事の 1 期目の就任成果として、4 年間で供用開始した大規模公園もあった。しかしこんな場合でも、大規模公園全域が完全に整備完了するものでなく、全域供用までにやはり長時間を必要とする。

④計画の総合性（プロデュース性）

基幹公園等の中・小規模公園の計画では、敷地調査から計画・設計、管理・運営までの公園整備プロセスと公園将来像を見通して、公園の計画内容を決定する作業がさほど困難ではない。あらかじめ公園の基本機能、敷地、周辺状況が決まっており、これらが与えられた条件として扱えるからである。

しかし大規模公園では、たとえば大人数の誘客を見込めばアクセス道路や鉄道駅を新設するなど、公園の計画如何で周辺状況を変えることも多く、与条件は不確定で流動的である。というより、大規模公園の整備によって地域社会の構造を再編し、地域の活性化を企図することに、公園の計画目標の主眼が置かれる場合が実際は多い。したがって大規模公園の計画策定では、位置・規模の検討にはじまり、計画目標・方針や公園像の設定、管理運営指針の策定といった大規模公園本体の検討とともに、周辺整備計画、整備波及効果の予測等の検討までも対象とし、総合的で複眼的な視点を求められる。

いわば計画者には、大規模公園の企画から誕生までをプロデュースする計画技術が要求されているといえる。

⑤設計の演出性（ディレクション性）

大規模公園の設計もまた、通常の公園設計と異なる発想が必要である。設計の前提となる基本計画は、大規模公園

*（株）総合計画機構

では縮尺1/2,500程度でコンセプトプランの域を出ないため、設計段階で公園空間の構成、土地利用、景観演出等を技術的、デザインの的に決定しなければならない。また利用活動や管理運営のプログラムなどソフトウェアのデザインも設計プロセスの大きな課題である。

しかしながら最も重要なことは、大規模公園の設計が整備事業段階に合わせて工区分けして行われることが多いため、ともすればバラバラになり勝ちであった公園全体の風景をコントロールし、トータルデザインを演出する設計者の役割であろう。すばらしいランドスケープデザインの公園となるかどうかは、設計者の環境演出の創造力と空間全体への浸透力・制御力にかかっている。

2. 計画・設計面からみた大規模公園の評価

大規模公園の計画・設計の取り組み方は、その公園の企画の出発点からして様々であるため、ルーチンワーク的な計画等の手法はあまり参考にならない。筆者が直接計画策定にかかわった大規模公園をあげても、大規模公園の適地選定調査からスタートした兵庫県の淡路島公園、都市開発が大震災を契機に公園に変わった兵庫県三木の総合防災公園、県立の工業団地造成が文化財発掘調査の結果全域歴史公園となった佐賀県吉野ヶ里公園、海岸環境整備事業等で生み出した用地を海洋性レクリエーション公園とした大阪府せんなん里海公園、そして国際花と緑の博覧会の会場となった鶴見緑地や全国都市緑化フェアの会場となった京都市梅小路公園など、業務名称は同じ基本計画、基本設計といえども調査・計画・設計の手法、求められる技術のレベルはそれぞれ大きく異なっていた。

それでも近年大規模公園の計画・設計事例が増えていく中で、全国的に計画・設計技術面での共通の成果が蓄積されつつあるように思われる。

その第1は、大きな風景の構成と演出の技術である。公園計画の際、公園機能のゾーニングを行うことが多いが、大規模公園ではこれが土地利用ゾーニングや環境テーマゾーニングとなり、最近では景観コンセプトゾーニングとして示すことが理解を得やすい。10年前の花博会場計画では、当初の土地利用ゾーニングが基本計画委員会により景観コンセプトゾーニングに修正されたことがあったが、今にして思えば非常に象徴的な出来事であった。最近オープンした国営公園の魅力も、個別の施設にあるのではなくダイナミックな風景にあるといってくると、ここにも計画・設計技術の具体的な進歩を見ることができる。

第2は環境に配慮した計画・設計の技術である。従来主流であった尾根をけずり、谷を埋めて、大きな施設利用空間を作るようなやり方は少なくなり、大規模運動公園とい

えども水や緑の中に位置して、周辺部も含めた生き物生態環境ネットワークの核としての役割を有するように計画・設計することが多くなっている。兵庫県の広域防災拠点として計画した三木総合防災公園でも、自然環境の保全と回復やミチゲーションが計画・設計の大きなテーマとなっている。また省エネルギーや資源リサイクルの視点は、今や大規模公園の計画・設計に欠くことはできない。

さらに第3には、管理運営ノウハウのストックが増える中で確立してきた管理運営の計画技術、第4に、基本計画のコンセプトを尊重しつつ時代ニーズに対応して計画・設計を修正するソフトラウンディングの技術などが、大規模公園の成果として評価されるが、与えられた紙面の関係で説明は省略する。

まとめると、大規模公園は我々コンサルタントにとって、新しい計画技術と優れたデザイン技法を生み出す格好の舞台となったといえる。

3. 大規模公園の展望

「大きいことはいいことだ」というCMの流れた時代、大規模レクリエーション需要を吸収することを目指して大規模公園は生まれた。土地の権原を取得した営造物である大規模公園は、アメリカの国営公園、イギリスのカントリーパーク、ドイツのガーデンショウの会場公園などを先例として、我が国に先端的なランドスケープ技術の導入や新しい環境文化情報の発信をもたらした。

このような役割は将来も薄れることはないが、地球環境の時代、福祉の時代の到来をみすえると、次世代型大規模公園のコンセプトが要請されていることも事実であろう。

その第1は、学校教育におけるカリキュラムや休日の変化、社会人の自由時間増大と生涯教育の普及浸透を背景として、環境学習や生涯学習の拠点としての使命が一層高まることである。第2は、さまざまな障害を持つ人々も健康者も同じように同じ場所で遊び、憩い、楽しみ、交流するノーマライゼーションの拠点、ユニバーサルデザインの舞台としての役割が強まることである。そして第3には、緊急時の防災活動の拠点としての役割がある。大規模公園は広域ブロック単位での救急活動・後方支援活動等の基地として計画する必要がある。

いずれにせよ大規模公園の本質は、その先進性と拠点性にあり、基本的に全国モデル、場合によっては地球モデルとしての意味と、大きな実験舞台であることに心しなければならない。こうした大規模公園の展開は、必然的に新しい公園づくりの方法論を必要とするが、そのキーワードは、計画決定プロセスと事業プロセスの透明性確保と、具体の計画づくりへの市民参加にあることも間違いはない。